



全国から月に60通

日本の自殺者数は昨年、15年ぶりに3万人を下回ったが、依然高い数字が続く。さまざまな団体が電話相談などに取り組む中、「自死・自殺に向き合う僧侶の会」には月平均60通の手紙が全国から届く。書簡のやりとりを重ねる人も多く、2007年の設立から総数は5千通を超えた。

事務局担当の前田有全住職が手紙をデータ化し、パスワード付きの電子メールとしてメンバーに送る。1人が返信を担当し手紙を書くが、3人が一組になって文案を検討した上、担当の僧侶が清書して出す仕組みだ。

「生きたいと思うからこそ書く。だから『生きてほしい』。一人で悩まないで』との思いを込めて手書きで返信しています。僧侶から届いた手紙を持ち歩く人も。寄せられた書簡は定期的におたき上げしている。受付は、郵便番号108-0073、東京都港区三田4-8-20、往復書簡事務局。



相談者から寄せられた往復書簡のファイル。古いものは定期的におたき上げしている＝東京都港区

「頭から死が離れない」。手紙の明読が終わり、重い沈黙が訪れた。「意見をどうぞ」。よく通る太い声が響く。長い机を囲む約10人の男女が同じ方向に目を向けている。視線の先にあるのは映写された手紙。吉田健一（@思も乱れた文字列を」と見詰めた。東京・築地本願寺の一室で開かれた超宗派の有志による「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の会合。全国から寄せられる自殺に関する相談に、僧侶が返信する往復書簡の活動を続けている。

事でない、本当に腹から出てきた相談者へのメッセージが込められている」と話す。「自分がもたらした温かい手紙。そう感想を込めて、未来の私に届くように」と語る。吉田は言う。「彼らの苦しみは過去の私の姿であって、未来の私に届くように」と語る。

「遺族はひとへくりでできない」と吉田。夫が自殺した場合、「なぜ気がなかつたか」と妻は親族から責められるケースがある。「鮮のむしろです。子どもたちも母親を気遣い、悲嘆を表現できずに我慢してしま

手書きが伝える温かさを

この日は受け取った手紙についてみんなで考え、返信内容の議論も行った。ただ、プライベートには細心の注意を払い、検討の場でも個人が特定される情報を出さない。

一般的な社会問題が『あなた』と『私』の関係になったんです。吉田の手紙について、往復書簡事務局を担当する東京都港区の曹洞宗正山寺住職の前田有全（@思も乱れた文字列を）は「決まり田有全（@思も乱れた文字列を）は「決まり田有全（@思も乱れた文字列を）」

述べるのは浄土宗僧侶の姿でもあると思いませんか。小川有閑（@思も乱れた文字列を）は「相談者と対面するのではなく、縁側に2人で座って庭を見ながら『世の中、生きにくいよね』と話す感覚がある」と語り、吉田自身も寺田有全（@思も乱れた文字列を）は「決まり田有全（@思も乱れた文字列を）」

格を取得。ただ、檀家（だんか）は少なく、他の仕事をしないと生活できない。選んだのは葬儀社勤めた。「葬式について知ろうと思

悲嘆を表現できない「自死遺族」への対応は大きな柱だ。遺族同士の分かち合いの会や「自死者追悼法要」も営んでいる。「子どもを亡くした人に『よく頑張っているねえ、強いねえ』という人がいるが、働いて苦しさを紛らそうとしているのに、と遺族は口を閉ざしてしま

「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の会合で映写された手紙を見る吉田健一（右端）＝東京・築地本願寺



「こんなときに僧侶はよ／＼と公教では天国とは言わない」と否定

（敬称略）文・西出勇志 写真・堀誠